

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

主体性が育まれる保育の工夫／学校法人仙台みどり学園 みどりの森幼稚園

興味をもち捕まえた生き物を飼いたくなる子どもたち。苦労して捕まえたり興味が深まったりするほど、身近に感じ飼いたい気持ちが高まります。この事例は、カエルとの関わりを重ねるだけでなく、大きく心が揺り動かされる体験により、様々な生き物へと関心が広がっています。子どもたちは真剣に生き物と向き合い「科学する心」が育まれる体験を重ねています。



○ 餌（園内全ての環境を取り入れる）／5歳児

✦ 「生き物は食べ物がないとこんな姿になってしまう」…カエルのミイラを観る

カエルのミイラを見付けたことで、カエルを飼っていた子どもたちはもちろんのこと、カエルへの興味が薄かった子どもたちにも「カエルへの興味」が沸き起こった。そして、「生き物は食べ物がないとこんな姿になってしまう」「自分たちのしていたお世話と、カエルにとって本当に必要なお世話は違うのかな？」と気付くきっかけになった。カエル以外の生き物にも興味をもつようになり、園外での活動でも、オタマジャクシ、カナヘビ、イモリなどとの関わりが増えた。

保育の工夫

ミイラのようなカエルの死骸を、クラス全員で見て考える機会をつくる。
生き物と関われる園外活動の機会をつくる。



✦ 「バエってつくからハエなんじゃない？」…カエルの餌を調べる

カエルのエサを毎日のように調べているとダンゴムシ、バッタ、コオロギ、ミミズ、チョウ、ホタル、ショウジョウバエなど、カエルの餌になる生き物がたくさんいることが分かってきた。そこで子どもたちにあまり馴染みのない虫を取り上げて、「ショウジョウバエってなんだろう？」と問いかけてみると、みんな「？」といった様子だった。その中で、Aちゃんが「ショウジョウバエでしょ・・・バエってつくから、ハエなんじゃない？」と考えたこと（予想）を話した。

保育の工夫

カエルの餌に出てくる生き物への興味がもてるように、子どもたちにあまり馴染みのない虫について問いかける。

✦ 調べて考えて実践する

次の日、Bちゃんはショウジョウバエの絵を描いてきた。Cちゃんはショウジョウバエのことを図鑑で調べてきた。「本当の名前は「キイロショウジョウバエ」で大きさは2mmくらい」と調べてきたことを、みんなに教えた。ショウジョウバエの大きさが2mmぐらいと聞き、絵を見た子どもたちは、小さいことに驚いていた。

その後、Dちゃんがヘビの天敵を調べてきた。「どうしてヘビの天敵を調べてきたの？」と聞くと、「だって、ヘビはカエルの敵だから」と自慢げに話した。「カエルをどうしたら守れるか？」考えたことで、「カエルの天敵をどうしたらやっつけられるか？」と考えるようになり、更に「カエルを生かすためには敵の敵も知らなければ」と考えから探求が深まって次々に調べ、いろいろなことが分かった。



子どもも保育者もショウジョウバエについて、日を迫うごとに詳しくなっていった。保育者が「キイロショウジョウバエは体が黄色で目が赤いこと。腐った果物とか生ごみに卵を産んで、生まれること」を話題にした。子どもたちは給食の残り屑を捨てる手伝いをしていたので、「幼稚園にある給食の残りを入れるやつ（コンポスト）にいっぱいいるんじゃない!？」と気が付いた。ビニール袋を持ってコンポストへ行き、大量のショウジョウバエだと分かるとすぐに袋をかぶせて捕まえた。

保育の工夫

カエルの餌や生き物への興味から、自分たちで調べて分かったことを伝え合う場面を大事にする。考えていることが、友達に伝わるように問いかける。

✦ 話し合う

その後、カエルの棲み処の池作りをする時には、餌が来るように池の周りに草木を植えることを話し合った。また、木にはカエルを食べるフクロウが来るかもしれないと話題になり、木を植えるか否か問題になった。

保育の工夫

カエルにとって良いことは何か、棲み処作りを考える子どもたちの思いが実現するように支える。

✦ 考察

カエルが住みやすい所はどんな所？

ミイラ事件以来、子どもたちなりに“生かすためにはどうしたらいいか”に向き合って世話を続け、「住みやすさ」ということが大事だと気付くきっかけになった。

カエルが食べられてしまうかもしれないことや、池の中で暮らしているのはカエルだけじゃないということなど、豊かな学びをしている。

▶ [関連事例：実践事例集vol.11 P.16～17](#)

無断転載を禁ず。引用する場合は下記を必ず明記願います。

「(C)公益財団法人 ソニー教育財団

ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」